皇室という「家庭」への眼差し
―― 近代日本における天皇家の「脱政治化」過程 ――

右　田　裕　規

1．戦前期「大衆天皇制」について

本論が主題にすえるのは、戦前期「大衆天皇制」の形成過程を、「家庭」というファクターとの連関において把握し直すことである。換言すると、近代天皇制のイデオロギー構造上に生じた質的変容のありようを、天皇家の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大という局面から再考するというのが、この小論の中心的なねらいとなる。

戦前期大衆天皇制とは何か。ここから議論を始める必要があろう。

筆者は別の機会において、松下圭一（1959）が戦後天皇制のための分析視角として提起した「大衆天皇制」概念を、近代天皇制に応用し、そのイデオロギー構造上に生じたラディカルな変質のありようを、民衆の皇室観／マスコミの皇室報道の「世俗化」という局面から論じてみた。その要旨は以下のごとくである。

1900－10年代を契機として、（近代化過程の進展と連動した）皇室観の世俗化という巨視的趨勢のもと、民衆のあいだでは、大衆天皇制下のそれに近似した天皇家への心性・態度が、急速に拡大する。天皇家を「スター」のごとき存在と捉え、かれらに卑俗な関心・愛情を向ける傾向が、都市民衆を中心に顕著となってゆくのである。爾来この「不敬」な皇室観は、マスメディアという近代装置と結びつくことで、拡大の一途をたどってゆく。それは、「現御神」たる天皇をシンボルとした、同時代政府の絶対主義的な民衆統治政策への対抗性を、被統治者側が鮮明にしてゆくプロセスと、まったく等価な事象であった。

かかる対抗的・自律的な皇室観の拡大と並行して、新聞雑誌社の流す皇室写真・記事もまた、政府による天皇家の神格化政策への対抗性を次第に明らかとし始める。すなわち1900－10年代以降のマスコミ界は、その商業主義化過程の中、天皇家の日常や趣味性格など、かれらの世俗的な側面をつたえる記事・写真を、大量に流布させてゆく。とくに20－30年代前半の皇室報道にかんしては、戦後大衆天皇制下のそれときわめて近似した性格をもつに至っていた。世俗的な皇室報道の大量流布という、大衆天皇制のもう一つの重要な

構成要件も、日本社会の近代化の進展と連動しながら、漸次満たされてゆくのである。

かくして天皇制のイデオロギー的再生産は、アナクロな教化政策に固執する政府の統制下から離れ、マスメディアのコマーシャリズムと、民衆自身の能動的な同意のもとに達成され始める。すなわち新聞雑誌界は、「スター」たる皇室の情報を強く欲する消費者側のニーズに敏感に応え、世俗的な皇室報道を日常的かつ大量に流してゆく。読者たる民衆は、かかる世俗的な皇室記事・グラビアの受容をとおし、皇室への憧憬・親近感をいっそうふかめてゆく。政府の媒介を抜きにした、民衆・マスコミのこの自律的な相互作用のもと、1900－10年代以降の日本社会では、天皇家にたいする民衆の「親愛の念」を支持基盤とした、大衆天皇制的なイデオロギー的再生産のありようが、（日中・太平洋戦争期を別として）時を追うごとに拡大していった（右田 2002）。同論考の内容は、以上のように要約される。

続いて右田（2004）では、この戦前期大衆天皇制の形成過程の内に、ジェンダーを軸とした一定の偏りが現れていた点を、詳しく論じてみた。すなわち近代の民衆において、皇室という存在を憧憬し、かれらに関心を向けてゆく傾向は、男性でなく女性においてヨリ強く出現し、それゆえに、世俗的な皇室報道へのニーズもまた、女性層のあいだでヨリ大きく生じていた。しかもこの女性層の憧憬・関心の中心にすえられていたのは、天皇家の男性たちでなく、皇后・宮妃らのほうだった。自身のライフコースの理想形として、あるいは「解放のシンボル」として、特殊的存在たる皇室の女性を捉え憧憬し、マスメディアの流す彼女らの世俗的な情報を、積極的に消費する。家父長制的原理の浸透という巨視的社会条件のもと、近代の女性層が行なった、かかる日々の実践が、天皇制のイデオロギー構造の世俗的再編の、大きな推進力としてはたらいた。右田（2004）ではこの事実につき、男性側の皇室観との比較を行ないながら概観した。

別の視点から捉えたとき、戦前期大衆天皇制と「女性」のこのつながりはさらに、もう一つの重要な論点を提供する。すなわち「家庭」という近代的要素が、戦前期大衆天皇制の進展プロセスに、ふかく関与していた可能性である。戦前期大衆天皇制の成長は、「家庭」を中心的な活動領域とした人々が、皇室という「家庭」を切り盛りする（と観念されていた）一群の女性をめぐる情報を、積極的に「消費」してゆくことをつうじて促進された。筆者の先の議論（右田 2004）とは、このようにも変換可能なものだった。これまでの二つの論考を踏み台に、戦前期大衆天皇制の形成過程をあらためて捉え直そうとする本論が、「家庭」という要素に着目するゆえんの一つである。

とはいえ、戦前期大衆天皇制と「家庭」の連関性というこの主題は、多少いりくんでいて、今一つの事前説明を必要とする。すなわち次節では、上記主題にはいるための準備的

な議論として、近代民衆の心性の位相で拡大した、皇室の「脱政治化」という現象をおさえてみる。少し遠回りとなるが、同事象の存在とその社会的意義を確認することが、戦前期大衆天皇制の形成過程と「家庭」の関係性をめぐる、後の議論をわかりよくするはずだ。

2．天皇の「脱政治化」現象

戦前の東京、府立精神病院内で、長い生涯の大半をすごした「芦原帝」の存在については広く知られ、かつ研究も多くある。1870年代後半から、紙上にその奇行が報じられ、一部で既に高名だった「誇大妄想狂」芦原金次郎は、日清戦争（1894年）前後を契機として、みずからを天皇に擬し始める。芦原帝と名乗り、「芦原国」という想像の共同体を精神病院内に建て、皇紀ならぬ「芦原暦」をつくり、奇想天外な勅語を濫発してゆくのである。やがて新聞記者たちは、記事の種が不足するとかれを訪ねるのを習慣とし始め、いくばくかの金を払って勅語を賜り、あるいはその時々の政治問題を語ってもらうようになる。20世紀初頭のことである。芦原帝の語る政談は、記者らの期待に背くことなく、無茶苦茶でありながら、いってい的を射たものだった。以来、芦原帝の記事・写真は各紙に定期的に掲載されてゆき、かれは民衆から多大な興味と人気をよせられるところとなる。たとえば明治末頃のかれは既に、「三大将軍」の一人として、東郷平八郎らと並び称されるほどの有名人となっていた。マスコミ記者の「芦原帝詣で」は、かれのなくなる1937年2月直前までつづけられ、なくなったその後も、すぐに伝記映画の話が進められるほど、広くながく近代日本の民衆・マスメディアに愛された人だった[1]。

芦原将軍論が一様に書くごとく、明らかにこの芦原金次郎という人物は、近代の政府が展開した天皇像を戯画化するために、マスコミが創出したスターであった。出版警察の目をはばかって、「芦原将軍」という呼称のほうが多く用いられてはいたものの、マスコミの報じたかれが、天皇のパロディ、「芦原帝」であったことは明白である[2]。この芦原帝をめぐる報道が、天皇を「現御神」と位置づける官製イデオロギーへの、民衆側の反発心をくみとる性格のものであったのもまた、うたがいない。しかし、マスメディアの中の芦原将軍の姿は他方で、同時代民衆が懐いた天皇観の、忠実なる写し絵でもあった。

---

[1] 1878年12月13日付『讀賣』「新聞」、1879年5月6日付『讀賣』「新聞」、1937年2月19日付『東朝』「何れが主客」、種村（1979）、須藤（1979）、川村（1990）、横田（1995）参照。

[2] じっさい、当時の新聞各紙は、かれを「芦原帝」ともしばしば表現し、その「勅語」の内容や「芦原暦」などにかんしても、好んで紹介していった。

知られるように、芦原帝人気が広がってゆく大正期は、本家たる天皇の行状をめぐるさまざまの噂が流布した時代でもある[3]。それらの噂はいろいろのバリエイションをもちながらも、大正天皇の政治能力の不在（カイライ性）を主題とし、それを暴露する性格をもつ点で、共通項を有していた。当時の民衆の噂の中に現出した、大正天皇のこのイメージは、もう一人の王・芦原帝のそれときわめて近い。主権者であることを自称しながら、その政治的能力・実権を欠き、空疎な政治的遊戯に日常をすごしているという点においてである。

両者のこの相同性のもつ意義に、いち早く着目したのが大澤（1998）だった。大正期における、二人の「無能な王」の出現は何より、そのような天皇を、当時の民衆が求め始めていたことの証左であると大澤はいう。大正天皇の、カイライとしてのイメージは、かれ個人の資質・実態に帰されるべき性格のものではない。あくまでもそれは、近代化というマクロな社会変動のもと、民衆の側が能動的に構築していった像である。もう一人の「無能な天皇」、芦原帝の大衆人気がこれを立証する、と。講演録という性格上、経験的資料をもって逐一立証してゆくスタイルをとっていないものの、大澤（1998）のこの見解は正鵠を射たものといっていい。天皇を政治的な飾り物として捉える眼差しは、大正天皇の個人的資質に由来するのではなくて、1900－10年代以降の日本社会の中に、ふかく制度化されたものだった。以下でこの事実を詳しくおさえ、大澤の議論を補完してみたい。

まず、大正天皇について。かれに、政治的君主としてのイメージが希薄であったという点にかんしては、その治世をじっさいに生きた人々も、しばしば証言するところである（出1963: 121; 和田 1984: 39-41; 徳冨1985-86:第三巻: 478）。大正天皇の政治能力へのかかるうたがいが民衆の中に芽生えたのは、皇位継承の段からだった。手塚富雄による少年時代の回想（1912年）を引くと、「新しくとどいた雑誌の口絵に新大元帥〔大正天皇〕の肖像がのっていた。私が家の門口で、ちょうどそこをあけてながめていると、近所の同年の友だちがやってきて、『これはダメなんだ、今度のはとってもダメなんだぞ』と言って、拳でトントンその写真をたたいた」（手塚 [1951] 1981: 12）。天皇となったまさに直後から、小学生にも指摘されるほど、かれの政治的実権の希薄さは（根拠のないままに）都市民衆にイメージとして広がっていた。事実、一部の資料・論考は、1900年代から既に、かれの政治能力をうたがわせるゴシップが、巷間に流れていたことを示唆している（松島 1956:219;V・O・J1959:146）。とくに有名な「遠眼鏡事件」の噂が、東京市民のあいだに流布し始めたのは、種々の証言にもとづけば、1910年代中盤のことである（出 1963: 121;

[3] 原（2000）は（噂の位相で現出したイメージとは違った）かれの「実像」にこそ迫ってゆくスタンスをとる。

中島 1967: 48;ねず 1974: 34)。帝国議会開院式という、最も「政治的な場」での天皇の逸脱振りを伝えるこの噂の拡大は、1910－20年代の都市世界において、大正天皇のカイライ的イメージが、いかに伝播していたかを物語ってあまりがある。

しかし、主権者としての虚構性を、同時代の「臣民」から指摘されたのは、大正天皇一人に限らない。その証左の一つは、「天ちゃん」の普及にかんする史的事実に求められる。鶴見俊輔によると「天ちゃん」は、戦前の民衆による天皇への愛情表現であると同時に、天皇のカイライとしてのイメージを、その内に含んだ呼称であった（鶴見 [1963] 1991: 412-3)。1922年生の鶴見はそう指摘した上で、自身の実体験をふまえつつ、この呼称の一般化した時代を、大正期に定めてゆく。事実、この時期に、大正天皇のさまざまの噂の流布とリンクする形で、「天ちゃん」という呼称が民間に普及したことは、芹澤光治良の自伝などにも看取される（芹澤 [1963] 1974: 110)。

しかし東京府内に限った場合、「天ちゃん」は、ヨリ早い段階から、一定の市民権を獲得してもいた。獅子文六の回想によるとこの呼称は、明治のおわり頃の東京で、既に広く用いられていた（獅子 [1968] 1969: 475)。また鶴見自身、同様の証言を、生方敏郎から聞いたと書いている（鶴見 [1963] 1991: 413-4)。天皇の政治君主としての側面を棚上げにするこの愛称は、大正天皇の治世以前から、好んで用いられたものであったのだ。1900－10年代以降、天皇の主権者としてのイメージが希薄となってゆくという事態が、大正天皇個人の資質に還元し得ない、ヨリ巨視的な背景を有していたことは、この「天ちゃん」の系譜学的事実にまず立証される。

天皇主権説が政府内部で勢いを得、機関説を駆逐していった、昭和戦中期に至っても、「天ちゃん」は民衆に好んで用いられつづけてゆく[1]。その政治権力の無限性が謳われた当時の昭和天皇にたいしてすら、カイライと捉える視線はしばしば向けられたのだった。じっさい、1920－40年代の男性「不敬犯」たちは、「飾り物」、「穀潰し」、「居候」、「青二才」、「お坊ちゃん」など、（左翼主義的語彙にもとづかない）みずからの言葉で、かれのカイライであることを好んで「暴露」した（司法省 [1928] 1980, [1929] 1979; 内務省 [1937-44] 1977)。また、天皇の眼鏡姿と趣味の生物学研究は、当時の民衆にとって、そのカイライ性（あるいは「大元帥」としての不適格性）のあかしとしても映ってゆく（原田 1951: 175-6, 237-238;司法省 [1928] 1980: 209, 308)。1928年、長野県の代用教員による授業中の発言から例を引こう。「〔重臣らは〕今の天皇には、帝王学や、生物学許り教えて世間の事情を知らせないようにしている」（司法省 [1929] 1979: 65)。

ここで強調すべきは、大正天皇にしろ昭和天皇にしろ、その政治的実権の不在の証左と

[1] たとえば中薗（1959: 150)、深田（1989: 379)、益田（1989: 42）など。

されたスティグマや逸話が、民衆によってなかば恣意的に選択・創出されたものである点だ。おそらくは、いかなる人物が天皇になろうとも、「粗」は探られ、その粗を根拠にかれのカイライであることが、真偽ないまぜとなりながら、民衆によって噂されていっただろう。繰り返すと、近代の民衆のあいだに拡大した、天皇を支配層のカイライとして捉える視線は、天皇個々人の資質に由来するのでなく、近代化にともない現出した、諸社会条件との連関において捉えられるべき事象である。「天皇には政治能力が不在である」というイメージが、大正期において拡大していった事実には、民衆をして天皇をカイライと捉えさせる社会的諸条件が、この時代に出揃ってゆくという以上の意味はない。そしてその社会条件を、大澤（1998）とは別角度から問うことこそ、本論の主題となるべきものなのだが、前置きをもうしばらくつづけたい[5]。

さて本論の文脈においたとき、この天皇家の脱政治化現象が興味ぶかいのは、同時代政府の展開した、天皇家をめぐるイデオロギー政策への対抗性を、それが鋭くはらんだ点にある。近代日本の支配層が、少数の学歴エリートにたいし天皇機関説（密教）を教授する一方、大衆に向けては天皇主権説（顕教）を徹底教化してゆくという、二元的な教育政策を採っていたことは、久野・鶴見（1956）によって既に周知である。天皇が国家の絶対的政治主体であるというタテマエを民衆に教えこむことは、その神格化政策とあいまって、能率的な国民動員を達成する上での必須の施策と、（とくに明治末以降の）政府に位置づけられていた（森川 1987; 小山 1989）。

さらに1930年代以降には、超国家主義の台頭下、この天皇主権説は絶大な力をもつタテマエ論と化してゆく。政府内の「軍部ファシズム勢力」の目論見のもと、学校教育をつうじた主権説の教化がいっそう徹底化されるのと並行して（森川1987）、明治以来、天皇を国家の最高機関と捉えることを特権的に許されていたエリート・官僚たちもまた、主権説の前に屈服・転向せざるをえなくなってゆく。天皇のもつ政治的権限の絶対性に少しでもうたがいを挟めば、たちまちに失脚してしまうごとき状況が、軍部と在野右翼の運動にもとづいて、日本の統治機構のすみずみに浸透するのである。1935年、機関説の主唱者である美濃部達吉の貴族院議員辞職とその著作の焚書処分こそは、かかる事態の象徴的出来事として存在した。

---

[5] 大澤（1998）は、大正期民衆において天皇の政治君主としてのイメージが希薄となった直截的な社会条件としては、天皇の主権をアイマイ化する民本主義の興隆を挙げ、マクロな社会条件には、かかる思想の流行を可能とし、あるいは必要とした、擬似的な市民社会（「都市」）の確立を挙げている。巨視的な射程をもつ大澤（1998）の大正天皇論のねらいじたいは、かくのごとき見解の内に収斂しないと思われるが、本論に直接連関する、天皇の脱政治化現象という歴史社会学的論点に限定した場合、そのようにまとめられる。

1900－10年代以降の民衆のあいだに生じた、天皇をカイライとして捉える視線の拡大は、かかる支配層側のイデオロギー政策の展開に抗する形で、伏流水のように進展していったものである。近代の日本社会の中で、脱政治的な存在として皇室を捉えること、語ることは、きわめて対抗的な実践としてあった。事実、同時代の支配層は、天皇家が政治的カイライとして表象されることに、一貫して異常な嫌悪感をもってたいしていた。繰り返すと、天皇家のカイライ性を語る言葉というのは、戦前の思想警察が作成した、不敬事件記録の常套句としてあった。見方を換えるとこの事実は、政治的飾り物として皇室を捉える視点が一般の民衆へと普及することを、(20年代前半の「開放政策」期を含め）いかに当時の政府がきらったか、顕著に示す証左にほかならぬ。大正天皇のさまざまの行状を噂すること、天皇を「天ちゃん」と呼ぶことも無論、当時にあっては警察取締の対象となっていた（司法省 [1928] 1980, [1929] 1979; 内務省 [1937-44] 1977; 鶴見 [1963] 1991)。

かくのごとき、警察当局の厳格な監視体制に無縁だった例外的存在が、先の芦原帝である。かれのみは、天皇のカイライ性を、マスコミをつうじて公然と暴き続けることが許された。それは、かれが「精神病者だった」からである。知られるように、「不敬犯」を精神病者に仕立てあげ、異端者（「忠良なる臣民」の例外）扱いをするのは、1910年代以降の警察の常套手段としてあった（井上 1995; 内務省 [1927] 2000)。「常人」が芦原帝のごとき振る舞いを行えば、まちがいなく不敬罪に問われるとともに、かなりの確率で精神病院に送られたはずだ。しかしかれはもともと「常軌を逸した者（非臣民)」として、精神病院の中に既にいた。芦原帝とマスコミは、警察側のやり口を逆手にとって、天皇主権説を唱導する一派が政府内で勢いづいてからも、逮捕・発禁処分をうけることもなく、天皇のパロディ記事を公に向けて創出しつづけていったのだ。「精神病者であること」は、近代の日本社会にあって天皇のカイライ性を堂々と主張する、唯一無二の手段であった（それゆえに芦原金次郎＝正気説が、当時の知識人のあいだで実しやかに語られたのだった)。マスコミが、戦前期最大のパロディストを精神病院の中に見いだしたのは、必然だった。

3．天皇家の脱政治化と「家庭」への眼差し

ここにおいて、ようやく本題に至ることとなる。なにゆえ、天皇家の脱政治化という現象について縷々書いてきたかというと、それが、大衆天皇制形成の重要な契機をなしているからだ。「大衆天皇制論」の中で松下圭一は、この皇室の脱政治化現象が、大衆天皇制の重要なメルクマールとなると述べた上で、その意義とマクロな背景を、ほかならぬあの「家庭」というファクターとの連関において、詳しく論じている。多くの事実誤認を含ん

でいるものの、その論旨は戦後天皇制のみならず、近代天皇制のイデオロギー的構造の実態を再考する上でも、きわめて示唆的な議論であった。

「〔戦後の〕天皇は、政治的軍事的性格を喪失して、文化的かつ家庭的性格をもつようになる。科学者と、皇室の家庭的団らんが天皇のイメージとなる。かつて天皇は古式装束以外は、ほとんど軍服を着ており、また天皇の科学研究は軍人から嫌悪されていた。しかしいまや天皇は、科学者であり家庭人である。…二〇世紀の大衆的君主は、フリードリヒ大王や明治天皇のように、国家理性の体現者であったり軍事的英雄であることは要求されない。…〔大衆天皇制下の〕『君臨』するのみの君主は、大衆ことに小市民層の日常的要求の理想とならなければならない。それはなによりも、『幸福な家庭』である。…戦後にいたって、明治、大正にはみられなかった皇室の『幸福な家庭』が実現されている。白馬上の軍服を大衆は畏敬したが、家庭の人にたいしては敬愛し憧憬する。…この『家庭』こそが大衆天皇制のシンボル価値である。大衆天皇制においては、皇室の『家庭』こそが、政治的に必要とされる。この家庭は、かつての家族国家思想にみられる『家族』ではないことはもちろんである。スターのモダンな『家庭』こそが、脱政治化した皇室の政治的存在理由となる」(松下 1959: 43-5)。

松下のこの議論の要点は、次の三つにある。第一に、大衆天皇制下の皇室は、政治とは無縁な存在として民衆に観念され、マスメディアに表象されてゆくという点である。かつて絶対君主・大元帥として振舞った天皇は、その政治権限をまったく失した存在として日本社会に現前する。それは、近代天皇制と戦後天皇制をわかつ、決定的な断絶面の一つであると松下は言う。ここで注意したいのは、実質的に天皇ならびに天皇家が政治権限を喪失したかどうかは問題ではないという点だ。民衆の懐く皇室観、マスコミによる皇室報道の位相で、天皇家が脱政治的な存在として現出してゆく。これこそが、大衆天皇制の重要な指標となる。

第二点は、この天皇家の脱政治化現象が、かれらの「家庭への埋没」の結果として、推進されてゆくという部分にある。大衆天皇制下の皇室は、「家庭」に最大の価値をおく大衆社会状況の出現に対応した結果、「家族人」として、もっぱら観念・表象されることとなる。天皇家の私的領域での些事が、民衆の重大な関心事として成立する。マスメディアの報じる天皇が、家族との団欒や趣味生活にひたすら没頭する存在となる。かれらの公的領域での活動ではなく、私的領域での暮らし振りこそが、民衆・マスコミに注目されてゆくのである。確かにこの事態こそ、天皇家の脱政治化の、何よりの現れとなるだろう。

第三に松下が強調するのは、かくのごとく、民衆・マスメディアによって「家庭人」と

して皇室が観念・表象されることが、大衆天皇制の再生産に重要な役割をはたしてゆくという点である。すなわちそれは、かれらの政治的イメージの希薄化を推進し、民衆が天皇の政治責任を問うてゆくごとき場面を霧消させる。「かつて天皇の名において強圧的政治が行なわれたとき、天皇は憎悪されるべき対象に転化しやすかったが、天皇が脱政治化して象徴天皇に転化したとき、むしろ天皇への非難は回避されるであろう。…スター化された象徴天皇は、もはや『神聖』ではないゆえに明治憲法よりもさらに『犯スヘカラス』となりうるであろう」(松下 1959: 44-5)。逆説的ながら、大衆天皇制下にあっては、天皇家がモダンな「家庭人」として振る舞い、政治とは無縁の存在となることこそ、天皇制をささえる重要な「政治的」機能をはたしてゆく。天皇家を脱政治的存在として捉える社会的眼差しの普及は、むしろ天皇制の支持基盤の強化を意味している。

この議論をふまえて、近代の日本社会に立ち返ってみたい。繰り返せば、脱政治的な存在として天皇一家が民衆に捉えられてゆくのは、戦後特有の現象では決してない。皇室の（タテマエ上の）政治的権限の多くを剥奪した新憲法の成立するはるか以前から既に、それは広く始まっていた。その一端として、芦原帝人気や大正天皇の噂、「天ちゃん」といった諸現象を、前節では概観した。

そして、戦前の皇室の脱政治化を指し示す諸現象の内でも、最も重視されるのが、松下がそのシンボル的事象と位置づけた、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大であった。それはまさに、二人の「無能な王」が日本社会に登場した、1900－10年代を契機に形成・展開されてゆく。天皇が、政治君主としてではなく、一個の「家庭人」としてマスコミ・民衆にクローズアップされる。皇室一家の瑣末な日常の出来事が詳しく報じられ、民衆が進んでこれを消費する。こうした事態の起原は、昭和の戦後ではなくて、明治後期にまで遡られるものだった。しかもこの皇室の「家庭人」化現象は、「天ちゃん」や芦原帝、大正天皇をめぐる先の諸現象を、はるかに上回る規模で、近代の日本社会に展開する。すなわち近代日本に生じた、天皇家の脱政治化現象の所在も戦後同様、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大（皇室の「家庭人」化）という局面の中に、最も顕著に見いだされる。換言すると、芦原帝・大正天皇という二人の「無能な王」の登場や、「天ちゃん」という呼称の普及は、同時代に開始したこの皇室の「家庭人」化現象から派生した二次的な事象、その「亜種」として位置づけられる。

無論、大正天皇の噂のラディカルさなどと比較すると、一見それは、当時の支配層の企図にもさほど反しない、「穏当」な現象ではあった。「飾り物」や「青二才」など、皇室のカイライ性が、直截的に表現されるわけでもない。だが、皇室の私的領域にたいする眼差しの社会的拡大が、天皇家の脱政治化を不可避的に促進させてゆくという、松下

の明快なテーゼをふまえるならば、それは同時代政府によるイデオロギー政策への、ひじょうな対抗性を有した事象としてあった。すなわち、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大プロセスとは、近代日本の民衆・マスメディアが、脱政治的存在として天皇家を観念・表象し、顕教たる天皇主権説への対抗性をふかめていった過程にほかならない。

1900－10年代に生じた、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しの拡大という現象は、次の点でも重要な意義をもつ。近代天皇制のイデオロギー的再生産のありようが、同時期を契機に劇的な変容を遂げた可能性をそれが示唆する点である。すなわちこの現象は、天皇家が「家庭人」・脱政治的な存在と社会的に見なされることで、あらゆる政治的諸結果から免責されるという、大衆天皇制的なイデオロギー的再生産のありかたが、（政府側の企図に反して）戦前から既に広がっていた蓋然性を示すものでもある。

そこで本論では、戦前期大衆天皇制の形成過程を、皇室観・皇室報道の「家庭人」化／脱政治化という局面から、さいど捉え直してみたい。具体的に言うと、1900－10年代以降の民衆・マスコミが、天皇家の私的領域に多大な関心を向けるとともに、かれらを家庭内に埋没した存在として観念・表象してゆくプロセスを、日本の近代化過程との関連において社会学的に考察することが、この小論ではめざされる。それは、次の三点についての新たな知見をもたらす試みとなるはずだ。第一に、天皇家をめぐる戦前期政府のイデオロギー政策にたいし、同時代の民衆・マスメディアの有した対抗性の所在を、天皇主権説との連関において再考しうるという点。第二に、近代化にともなう天皇制のイデオロギー的構造の変容を、皇室の脱政治化という角度から明らかにできるという点。第三に、戦前期大衆天皇制の形成と日本社会の近代化過程の関係性を、「家庭中心主義」の浸透というファクターとの連関において考察することを可能ならしめるという点である。

本論の議論と直接関連する研究につき、簡潔に整理しておきたい。戦前のマスコミが、皇室の私的領域の様子をしばしば報じていた事実にかんしては、近年の多くの研究が既に指摘する。最も詳しいのは北原（2001）・加納（2002）・伊藤（2005）だが、原（2000）・川村（2002）・牧原（2004）なども、二次的な形でこれに言及する。本論とはぎゃくに、この一連の研究の多くは、かかるマスコミの動向の背景に、同時代支配層の懐いた政治的企図（近代西欧的な家族観／「家族国家観」の啓蒙等の目論見）をこそ、優先的に見いだしてゆくスタンスをとるものだ[6]。それゆえに、戦前期皇室報道の上記傾向が

[6] 但し原（2000）はこの事象を、同時代の天皇家の実態の反映と捉えるスタンスをとる。また牧原（2004）は、1900年代のマスコミに現れた、近代的な子ども観にもとづき皇孫たちを報じる傾向と、同時代の日本社会に勃興した、新しい子ども観との連関につき触れている。

内包した、支配層のイデオロギー政策への対抗的な側面（天皇家の脱政治化現象との連関性）は、いまだ論及されていない部分となっている。近代の民衆が、皇室の家庭生活に多大な興味を自律的によせてゆく場面もまた、先行研究では触れられないままに措かれてきた。これにたいし本論では、民衆・マスメディアそれぞれの能動的な動向・論理を重視しながら、近代の日本社会における、皇室という「家庭」への社会的眼差しの誕生・拡大プロセスを、天皇家の脱政治化という視座から捉え直してゆく。なお調査対象とした新聞は、『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』『讀賣新聞』『時事新報』『国民新聞』『萬朝報』の８紙である（以下では略記する）。

４．戦前期皇室報道における「家庭」への眼差しの登場

まず、1900－10年代以降のマスメディアが、「家庭」を皇室報道の中心的なトピック・キイ概念にすえてゆくプロセスを、大つかみに見ておきたい。

①≪幸福な家庭の実現≫

1890年代以前のマスメディアの伝える皇室に、「家庭」はないに等しかった。皇室の日常・私的領域の様子というのは、むしろ当時の新聞雑誌社の、ひじょうに敬遠したトピックとしてあった（右田 2002）。しかしこのような状況は、20世紀のはじめから、大きく変貌を遂げる。同時期を契機に各マスコミは、天皇家の家庭生活・日常の様子を、好んで報じるようになるのである。しかも、ただに皇室の家庭内の様子を伝えるにとどまらない。その報道の内容は、大衆天皇制下のそれと、時を追うごとに近しくなってゆく。すなわちそこでは、円満で、情愛に満ちた皇室の家庭内部の様子が、中心的なトピックと化してゆく。大衆天皇制の要件の一つたる、かれらの「幸福な家庭」振りは、1900－10年代のマスコミによって、早くも演出され始めていたのである。具体例を、新年恒例の皇室記事から一つ引いてみる。「〔迪宮裕仁・淳宮雍仁は〕御徒歩にて凛々しく御制服に背嚢を負わせ給い御仲睦まじく御手を繋がせられて御登校あるが常なりと申す…時には学習院より御帰殿ありて直に背嚢を負わせられたる侭親宮両殿下〔大正天皇・貞明皇后〕の御傍近く成らせられ『オモー様只今』『オタタ様只今』と御挨拶遊ばしたる後…何呉れとなく院の模様抔御物語りあるよし…親宮両殿下にも時折三笠の御殿に成らせられ御兄弟の宮が活発に御運動遊ばすを御覧ありて打笑せ給い時には御父子御揃いにて鬼ごっこ抔の御遊戯もありと申す」（1910年１月１日付『時事』「新年の三皇孫」）。

20世紀前半期のマスコミが、皇室の「幸福な家庭」振りを好んであらわしたことは、次の点にも如実である。これを指し示す、文字どおりの言葉（「団欒」「まどい」等）が、当時の皇室報道の中で頻繁に使われている事実である。1910年代の皇室記事・グラビアの見出しからいくつか例示すると、「皇室の御団欒」（1913年10月6日付『東朝』）、「葉山御用邸の御団欒」（1915年2月7日付『讀賣』）、「雲上のおまどい」（1917年1月1日付『東日』付録）。とくに20年代以降になると、「家庭」への傾倒を端的にあらわす一連の語彙は、皇室の日常生活をめぐる報道の、必須の用語と化すに至る。

マスコミの公開した皇室写真にも、同様の傾向は強く見いだせる。天皇家の親子・きょうだい・夫婦の姿をともに捉えた「家族写真」の公開は、その一つの象徴であるだろう。天皇家のこの家族写真にかんしては、1900年代の雑誌のグラビアページ中に、既に散見され始める。皇族のスナップ撮影が大幅に規制緩和された20年代以降には、夫妻の睦まじい姿、家族での余暇の様子、私邸内での団欒の風景など、かれらの円満な家族関係を端的に捉えたスナップ写真も、新聞紙面や雑誌の口絵に多数登場していった。『讀賣』を事例にすると、1922年度には14枚、1923年度には8枚、1924年度には15枚と、皇室親子・きょうだい・夫婦の姿を収めたスナップ・記念写真が、コンスタントな形で紙面に掲載されている。

天皇家の「モダンな余暇生活」も、1900－10年代以降のマスコミが、好んで報じたトピックだった。同時期より、スポーツや各種の娯楽に皇室一家の興じる姿を伝える記事・写真が、新聞雑誌に頻繁に掲載されてゆくのである。とくにこの傾向は、20年代以降に顕著なものとなる。「東宮同妃両殿下のお睦まじさは既報の通りで…東宮殿下がゴルフに深い興味を持たれているのを御覧になった妃殿下は、近頃よく新宿御苑のゴルフ場で殿下からゴルフを教わっていられる　技術はなかなか優秀、東宮さまもお喜びとはめでたしめでたし」（1924年4月18日付『讀賣』「お茶うけ」）。くわえて興味ぶかいのが、天皇家の家庭生活を伝える記事中で、（調度品や衣食、子どもの遊具から住居に至るまで）西欧的・近代的なアイテムが頻出している点だろう。当時の皇室報道では、家族関係のみならず、余暇やライフスタイルのありようまでも含めた形で、その幸福でモダンな家庭振りが演出されていたのである。

②≪皇后・宮妃への視線の集中≫

近代のマスコミが、天皇家関連の報道に、「家庭」という要素を好んで結びつけていった事実を最も顕著に物語るのは、皇后・宮妃へのその視線の集中である。私的領域を中心

的な活動の場とした彼女らこそが、マスメディアによってクローズアップされてゆく。これこそ、マスコミの位相で、天皇家の「家庭人」化／脱政治化が進展したことを指し示す、何よりの現れではなかったか。

筆者別稿をごく簡潔に確認すると、1900－10年代を契機にマスメディアは、皇后・女性の皇族関連のトピックを、皇室報道の中心に布置してゆく。内容も、彼女らの政治的動向や「御盛徳」を簡潔につたえた以前のそれとは大きく違っていて、その日常・余暇生活、趣味性格や服装等、彼女らの世俗的な側面を、当時のマスコミは好んで報じ始めていた。背景に、同性の皇族にたいし多大な憧憬と関心とを向けた、女性読者の心性が大きく関与したことも、同論考において既に明らかとした部分である（右田 2004）。

この議論を補足すると、1900－30年代のマスコミが頻繁に報じた、彼女らの「日常」や「趣味」の中心に布置されたのは、ほかならぬ「家庭」であった。未婚の女王の場合には、「未来の良妻賢母」たるべき十全な準備・修養の様子が、既婚者の場合には、家事育児を完璧にこなすその優れた「御主婦」振りが、彼女らの「日常」の中心をなすものとして、好んで報じられてゆくのである。1910年代の貞明皇后、1920年代の良子皇太子妃の「御日常」をつたえた記事を、それぞれ引いてみよう。「御坤徳海の如き皇后陛下の御近状を承わるに…ただ御内儀深くたれこめ給い専ら皇太子殿下並びに二皇子殿下の御教育に御心を傾けられ…」（1913年１月１日『東朝』「大内山の春」）。「妃殿下は…〔皇太子の〕宮城御出日である水土曜…にはお帽子を手に親しく内玄関までお見送りになり御機嫌よく送り出され、還啓の折も同所でお疲れの東宮殿下にニッコと微笑さえ湛えていく分にもお慰め申すよう愛嬌よく御出迎い遊ばされよもやまのお物語りがあり、静かな夜にお手づから得意のピアノをおひきになって興を添えられる…〔妃は〕万事がこの調子で…東宮殿下にお仕えされる様はほんとに申し分のない主婦ぶりで在すと申すことである」（1924年３月16日付『讀賣』「天っ晴れな御主婦ぶり」）。

この点でも、1900－10年代以降の皇后・妃をめぐる報道は、前時代のそれとの明確な切れ目を見せている。1890年代以前のマスコミが、彼女らの家内領域での役割を主題的にとりあげることは稀だった。婦人雑誌ですらそうだった。当時の彼女らをめぐる報道の主流をなしたのは、男性の皇族と同様、公的領域での活動を伝えるものであったといっていい。

これにたいし、1900－30年代の女性の皇族関連の報道では、「家庭」という要素は、およそあらゆるトピックに付与された。たとえばこの頃のマスコミが好んで報じた彼女らの「趣味」の中心的カテゴリーの一つは、割烹やピアノ、裁縫など、「家庭的」なもので占められた。じっさい当時の記者による女性の皇族への取材は、かかる「家庭的・女性的」な趣味性格を求めて実施されてもいた（小野 [1929] 1993: 339-42; 小田部 1991: 178）。戦前期

皇室報道に現出した、彼女らと「家庭」とのふかい結びつきはあくまでも、マスコミによって意図的に構築されていったものだった。この点は、強調しておくべき事実だろう。

③≪天皇家の「子ども」の誕生≫

皇室の「子ども」をめぐる報道の頻出も、1900－10年代を契機に、マスメディアの位相で皇室の「家庭人」化が進展した、シンボリックな現れの一つである。無論、幼少の皇子をめぐる報道じたいは、明治前期から見られるものではある。但し当時のマスコミのあらわした幼い皇子らの姿は、誕生してまもなく種々の政治的儀礼を執り行なうごとき、きわめて公的・政治的な存在としてあった。成人の皇族との表現上の差異は薄く、「無垢・無知」で未発達な様子が報道されることも稀だった。管見では、両親宮によるその愛育の様子などが報じられた事例も、1900年代に至るまでは稀少である。その意味で、1890年代以前の皇室報道の中に、「子ども」は存在しなかったといっていい。

これにたいし1900－10年代以降のマスコミは、幼い皇子・皇女らを、近代的な子ども観にもとづき着目し始める。かれらをめぐる報道では、その公的領域での活動が次第に霧消し、その政治的側面は希薄化する。かわって、その可愛らしさや無垢な様子、両親宮への依存振りなど、かれらの政治的・人間的な「未熟さ」が、中心的に報じられてゆくのである。たとえば1902年、誕生して8カ月ほどした迪宮裕仁（昭和天皇）の様子を、当時の『東日』はこう伝える。「御容貌は御丸顔にて御頬のあたりふくふくと肥えさせられ、御眼は父宮に能う肖させ給いて御口元は母君を其侭なり、御愛くるおしき御ありさま何と申し上げ奉つらん詞も知らず、昨今は…ああ、ああ、など語らせ給いて御付の方々を見させ給いては折々に笑ませ給う…」（1902年1月1日付『東日』「皇長孫殿下の御事」）。

さらに1920－30年代になると、その「愛らしさ」「無邪気さ」を強調する言葉は、幼い皇子らをめぐる記事・写真見出しのキイワードと化すに至る。当時の新聞の写真・記事見出しからいくつか引くと、「いたいけな御姿よ　最近の澄宮殿下」（1921年10月4日付『国民』）「お可愛らしく御健やかな照宮殿下」（1928年12月6日付『大朝』）「皇太子さま　ヨチヨチ御歩きのお可愛らしさ！」（1935年7月8日付『讀賣』）。

このように、かれらの「未成熟性」が強調されてゆくのと並行する形で、「遊び」という要素もまた、幼少の皇子関連報道の、重要な構成部分となってゆく。童謡や昆虫採集、砂遊びなどの「子どもらしい」趣味、使用している玩具、きょうだい・学友との遊戯の様子などが、マスコミによって頻繁に報道されてゆくわけだ。この点も、1900－10年代を契

機とした、幼少の皇子の脱政治化の進展を、如実に物語る事実だろう。

政治的存在としての側面を失したかれらはかくして、私的領域に最もふさわしい存在、すなわち天皇家という「家庭」を象徴する存在となる。じっさい、1920－30年代の頃になるとマスコミは、かれら幼少の皇子・皇女らを、天皇家という「幸福な家庭」のシンボルとして、明確に位置づけるに至る。このことは、当時の昭和天皇一家の団欒の風景を報じた記事中で、親王・内親王を一家の中心に布置するレトリックが、頻出している事実に端的だ。当時の新聞見出しから例を引くと、「照宮〔成子〕様を御中心にうち寛がせ給う」(1928年11月28日付『大毎』)「皇太子様中心に和やかな御団欒」(1936年１月１日付『国民』)「皇太子殿下きょう御誕辰　御団欒の御中心」(1936年12月23日付『東朝』)。

天皇家の「子ども」関連の報道について、もう一点触れておくべきは、両親宮によるその愛育の様子が、さかんに強調されていった点である。繰り返すと近代のマスコミは、皇后・妃による愛情に満ちた育児振りを、彼女らの日常の重要な一部にすえてゆく。それとともに、父宮と子どもの睦まじい交流の風景も、しばしば報じられる話題の一つとなる。たとえば1900－10年代のマスコミが、大正天皇の子煩悩ぶりを好んでつたえている事実にかんしては、原（2000）も既に指摘する。もっともそれは、かれの個人的資質の反映（原2000: 104-151）などではない。1900－10年代を契機としてマスコミが、皇室の親子関係をそのように表象し始めたという以上の意味はそこにない。子煩悩として報じられたことにかんしては、同時代の他の父宮たちものきなみそうだった。しかも1920－30年代になると、親王・内親王の日常を伝える報道では、「両陛下の御慈愛のもとに」「両陛下御愛撫のもとに」というレトリックの使用が慣例化するほど、昭和天皇夫妻によるその溺愛ぶりが強調されるに至っている。この一連の「愛育」報道は、「幸福な家庭」のシンボルたる幼少の皇子・皇女との関係性をつうじ、天皇・男性の皇族を含めた皇室の人々ぜんたいが、家庭内に埋没した存在として表象されてゆくという点でも、重要な契機として記される。

以上、簡潔に概観したように、皇后・女性の皇族、幼少の皇子らを皇室報道の中心に布置し、なおかつその私的領域での活動を焦点化することで、1900－10年代以降のマスメディアの報じる天皇家は、総体としてその政治性を希薄化してゆく。政府が明確に公的存在として規定した、天皇・男性の皇族関連の報道の中でも、家庭内での活動振りが、その重要なトピックの一つとなっていた。のみならずそこでは、皇室による「家庭」への傾倒振り、かれらが私的領域をひじょうに重視している点が、主題的に報じられることとなる。それはまぎれなく、近代日本のマスメディアが皇室を脱政治的な存在として好んで表象し、

顕教である天皇主権説との対立をふかめてゆく、重大な局面としてあった[7]。

5.「家庭中心主義」との連関

考察を先に進めよう。何ゆえ1900－10年代を契機にマスメディアは、「家庭人」・脱政治的な存在として、天皇家を好んで表象していったのか。

松下（1959）に従えば、大衆天皇制下のマスコミに生じる、皇室の「家庭人」化・脱政治化の最大の要因は、「家庭」という場を価値づける社会規範の確立に求められる。それはおおまかにいえば、次のような意味合いにおいてである。

大衆天皇制下の天皇家の、「スター」としての側面は、大衆の「日常的要求の理想」をかれらが体現することによって補完される。すなわち、そのような存在として皇室がマスメディアに日々報道されることではじめて、民衆による天皇家への憧憬・親近感は、スムーズに再生産されてゆく。換言すると、マスコミ側にとって、民衆の「日常的要求の理想」として皇室を表象することは、彼らの「スター性」を補完し、その人気・集客力を継続的に販売戦略に活用してゆく上での、重要な位置を占めることとなる。

では、大衆天皇制下の民衆の日常的要求の中核をなす価値とは、いったい何か。それは、「幸福な家庭」にほかならぬ。私的領域の充実をこそ追求すべきとする価値観が浸透する大衆社会状況のもとでは、皇室が「幸福な家庭」として現前することではじめて、その

---

[7] ここで、日中・太平洋戦争期の状況につき簡潔に補足しておくと、かかる傾向がトーンダウンするのは確かである。「皇室の家庭人化」という側面から捉えても、大衆天皇制はやはり、戦時中にその歩みをいったん止めている。とくに天皇関連の報道の場合、軍務を中心とした公的領域での活動が突出して報じられていたことは、別の機会にもふれた（右田 2002）。とはいえこの日中・太平洋戦争期にも、皇室のなごやかな家庭生活をつたえる報道は、それなりに残存した。子どもと皇后・妃を中心に、皇室の「幸福な家庭」の様子は、この8年間も、一定ていどマスコミによってあらわされつづけてゆく。「家庭」という視点から捉えたとき、日中・太平洋戦争期の皇室報道は、1890年代以前のそれよりも、1900－30年代前半の皇室報道のほうと、高い相同性をたもっていたといってよい。さらに補足をつづけると、天皇家を「家庭人」として捉える民衆・マスコミの眼差しが、天皇主権説への対抗性をふかくはらんでいる点については、戦前期政府も明確に認識し、かつ懸念を抱いていた。とくにこの警戒は、天皇主権説が統治機構内部で席巻した、昭和初期に最も顕著に現れる。それは、天皇家の猥談の取締に躍起となっていた、当時の内務官僚や末端の行政警察においてだけではない。天皇の生物学研究にたいする世間の風あたり、かれが皇后とともに麻雀に日々興じている旨（いわゆる「宮中麻雀」）の噂の拡散など、天皇が私的領域に埋没しているというイメージの普及は、当時の重臣層でも明らかに問題視され始めていた（原田1951: 175-6、237-238; 高橋他編 1993-94:第五巻: 198）。皇室の団欒の模様のリークをつよくきらった、20年代後半以降の宮内官僚にも、この指摘はまったくあてはまる（高橋他編 1993-94:第三巻: 63,88）。事実、当時の宮内省は、天皇一家の私的な親子写真のマスコミ貸与を、内規で禁止してもいた（内務省 [1936] 1982: 5）。20年代後半以降の新聞雑誌社が、天皇と皇太子・内親王をともに収めた写真の掲載にあたって、各々の肖像写真をもとに、その「親子写真」をしばしば捏造せざるを得なかったのは、この禁止措置に何より由来する。「家庭」への天皇の傾倒振りが、写真という形でシンボリックにあらわされることで、その脱政治的なイメージが拡大してしまう。かかる懸念が、上記禁止措置の背景に存在したことはうたがいない。

「スター性」が担保される。言い換えれば、「幸福な家庭」の実現こそ、近代社会の民衆が、「スターとしての天皇家」に求める最大の要素である。大衆天皇制下のマスメディアが、皇室の幸せな家庭生活を中心的に報じてゆくのは、この読者のニーズに応えた結果として存在する。「大衆天皇制論」によれば、戦後マスメディアによる、皇室の私的領域への多大な関心は、おおよそこのような機制のもと、形成されたものであるという（松下1959:44-5）。

他方、前節で概観した近代日本のケースはどうか。

私的領域の充実を謳うイズムの「大衆化」の端緒もまた、1900－10年代の都市民衆に見いだせる（南他1965）。戦後になってかかる傾向が加速・拡大したのは確かだが、それは戦前から一定の広がりを見せた価値観でもあった。とくに20－30年代の都市民衆のあいだでは、「家庭中心主義」が席巻し、夫婦・親子での娯楽・余暇生活を重視する傾向が広範に生じたことで知られている（南他 1987: 62）。このような民衆の動向に呼応して、かれらのモダンな家庭生活をサポートする商品・施設が、同時代の企業の手によって多数登場することも、既に周知の事実だろう。例示すれば、百貨店による「主婦」や「子ども」を対象とした販売戦略の展開、鉄道会社を中心とした諸レジャー施設・郊外住宅地の開発、マスコミ界での家庭・子ども雑誌の隆盛など（南他 1965, 1987; 吉見 1992; 初田 1993）。「幸福な家庭であること」が、皇室のスター性を補完してゆく上での前提となる、近代的な価値規範・諸装置は、1900－10年代において、既にあるていど出揃っていた。皇室報道の中に出現した、モダンで幸せな家庭生活が、当時の民衆の目に、自身の「日常的要求の理想」として映っていたことは、ここにおいて想像に難くない。

事実、右田（2004）に論じた、戦前期女性の皇室観のありようこそは、「幸福な家庭」という要素が、皇室の「スター性」を補完してゆくという事態の、典型例を示していた。

あらためて同論考での筆者の議論を確認しておくと、1900－10年代以降、女性層のあいだには、同性の皇族を強く憧憬し、彼女らの世俗的な情報を求めてゆく態度・心性が、階層・地域を越えて拡大する。近代の女性層の中に、かかる心性が広範に形成されるに至った背景には、皇后・妃による「幸せな結婚の達成」（皇族との婚姻をつうじたハイクラスの獲得・再生産）への羨望が、その要因として大きくはたらいた。換言すると、（配偶者の「家庭」にはいることを前提とした）自身のライフコースの理想形として、皇后・宮妃が彼女らの目に映ったことに、その形成要因の一つをそれはもっていた（右田2004）。戦前期女性のこの心性において、皇后・妃の「スター性」はまさに、彼女らが「幸福な家庭（の妻・母）」であることによって、大きく補完されている。同時代の新聞・婦人雑誌が、女性読者のニーズに応える形で大量生産した、皇后・妃たちの報道中で、その「幸福な家

庭（主婦）生活」を中心トピックの一つにおいたのも、それが皇后・宮妃の「スター性」を再生産する上での、最も有効な話題であったからにほかならなかった。

1900－10年代以来の、皇室報道の「家庭人」化の背景に、家庭中心主義の台頭がはたらいていたことは、ここに確かだといえる。私的領域を重視する思想の社会的浸透にともなって、「幸福な家庭生活の実現」が、民衆（とくに女性）の欲望の重要な部分をなしてゆく。それは同時代のマスメディアにとって、皇室の「幸福な家庭」振りを報じることが、かれら（とくに皇后・宮妃）のスター性・集客力を補完する上での、最も重要なファクターに確立してゆくことを意味していた。松下（1959）の指摘した、戦後大衆天皇制のそれと同様の機制が、戦前期大衆天皇制のケースにも、はたらいていたといっていい。

もっとも、1900－10年代以降に頻出した、天皇家の幸せな家庭生活を伝える報道は、読者のニーズに応えるというのみならず、マスコミ・企業の側が、読者の心性にたいし、積極的にはたらきかけてゆく契機を含むものだった。以下では、松下（1959）から少し離れて、かかる報道と家庭中心主義の関係性を議論してみたい。

繰り返すと、日露戦後の民間企業は、モダンな家庭生活を強く求め始めた都市民衆の台頭に応じ、これに関連した商品・施設を多数登場させてゆく。それは、民衆の望むライフスタイルを補完する諸装置が、日本社会に整備されていった過程であると同時に、企業の側が、家庭中心主義の台頭を、自己の販売戦略に活用してゆくプロセスとしても存在した。注目すべきはこのプロセスの中で各関連企業が、皇室という「家庭」を販売戦略に好んで活用し始めている事実である（山本 1990）。すなわち1900－20年代の家庭用品メーカー・雑誌出版社は、自社製品の広告に、「○○妃殿下御嘉納」「各宮家御買上」など、皇室をめぐる諸記号・図像を頻繁に用いてゆく。しかもこの類の広告掲載において各企業は、「主婦」向け商品なら皇后・妃を、「子ども」用品ならば幼少の皇子をと、該商品の消費者層にしたがいながら、登用する皇族を明確につかいわけていた。それはうたがいなく、「幸福な家庭」（自身の「日常的要求の理想」）として皇室を憧憬する読者の心性を刺激して、自社製品・施設の売上拡大につなげてゆこうとする試みだったといっていい。

20年代前半のマスコミ・レコード業界が、「童謡」という新興の児童向け文化の普及を仕掛けてゆくさいに、澄宮崇仁という、当時の天皇家の代表的な「子ども」を広告塔に登用したのは、その最たる例である。20年代はじめ、いまだ学齢にも達していなかったこの澄宮は、幼少ながら詩作を得意とし、多くの童謡を私的につくっていた。1921年8月に、『東日』『大毎』がこの事実をスクープすると（小野 [1929] 1993: 310-327）、以来マスコミはかれを「童謡の宮様」と呼びならわし、こぞってその童謡を入手・紹介していった。「童謡の宮」をめぐるこれら一連の報道は、民衆の間に大きな反響を呼び、この児童文化

が民間に普及してゆく上での、一大契機としてはたらく（金沢他編 1968: 353; 金田一 1983: 236）。ここで注目すべきは、澄宮というシンボルをつうじたこの童謡の啓蒙過程が、商品経済とふかく結びついていた点だ。たとえばかれの童謡は、20年代のマスコミ・レコード会社により、作品集やレコードとなって数多く販売・消費されている。当時の「大正っ子」たちが、澄宮の童謡を印象ぶかく記憶しているのは（伊馬 1976: 87; 八木 1989: 24）、かかる媒体との連動に何より由来した。事実、20年代前半に、大阪毎日新聞社の発売したかれの童謡集などは5万部近く売れたと、このブームの仕掛け人は回想する（小野 [1929] 1993: 319）。くわえて20年代には、作品集やレコードのみならず、浴衣やノートなど、澄宮の童謡をモチーフとしたさまざまの児童向けグッズも、広く売買されていた（金沢他編 1968: 353）。

ここにおいて、1900－10年代以降のマスコミが、私的領域に埋没する存在として皇室を好んで表象していった、もう一つの背景が示されることとなる。すなわちそこには、「家庭」を重要な市場として捉え始めた、同時代の企業（広告主・マスコミ自身）の思惑も、ふかく反映されていた。皇室を、「幸福な家庭」としてあらわす当時の報道の数々は、皇室を「日常的要求の理想」として憧憬する読者の心性を刺激し、彼女らに「家庭への投資」を促してゆくという、広告的な側面を内包したものだった。じっさい、当時のマスコミがあらわした、モダンな商品と娯楽に満ちた皇族の「幸福な家庭」振りは、きわめて広告的である。構成員間のふかい愛情にもとづいて、モダンな家庭生活の達成に資本をそそいでゆくかれらのその姿は、当時の民間企業にとっての「理想の家庭」でもあった。その意味で、近代日本に生じた、皇室の私的領域にたいする社会的眼差しは、民衆・マスメディア・民間企業という三者の相互作用のあいだで、強化されていった側面をもっていた。

6．皇室の猥談

とはいえ、家庭中心主義の台頭が近代の民衆に育んだ、皇室の私的領域への関心のありようは、自身の欲望を理念型的に達成した「幸福な家庭」としてかれらを憧憬する、という形に限定されるものではない。また、そのように限定しないとき、ジェンダーや都市／農村、階層を越えた広がりを、それは近代の日本社会で見せている。その代表的な事例として、皇室をめぐる「猥談」の流行現象を、以下でとりあげたい。

この類のゴシップの流布も、20世紀にはいってから、顕著となった事象である。不敬事件記録等によるならば、それは地域・階層にさほど関係なく、流行した現象ではあった。

ジェンダー差にかんしていうと、それはむしろ男性側において目立って見えている[8]。

この皇室をめぐる猥談の流行現象こそは、1900－10年代を契機とした、皇室という「家庭」にたいする社会的関心の拡大を、最も端的に示す事象と捉えられる。第一にそれが、皇室の私的領域の「実像」を、その内奥にまで踏み込んで語ってゆく性格を、本来的に有した点。第二に、皇室の家庭生活の亀裂や「乱倫」が、そこではしばしば主題とされていたという点においてである。両者を満たす具体例を、1915年11月の徳冨蘆花の日記から引いてみたい。「〔友人の噂によると〕嘉仁君〔大正天皇〕も中々スキで、皇后さんの出産と同じ月にお妾の産が迫って居る。それは多分華族の女で、灯火をすすめる女官なのだ。…美人だそうだ。此は公然の秘密」（徳冨1985-86: 第二巻: 167-168）。

人々はまた、皇室報道の中に、その「幸福な家庭」の綻びを、積極的に読み込んでゆく。当時の皇室をめぐる猥談は、そのような形でもしばしば展開された。蘆花と岸田劉生の日記から引用する。「〔1917年12月30日〕初花の内侍が宮中を出た、と新聞にある。〔大正天皇の〕お妾さんの一人なんめり。…お節さん〔貞明皇后〕のいびり出しだ」（徳冨 1985-86:第六巻: 170）。「〔1921年２月10日〕新聞の〔宮中〕某重大事件というのは未成婚の皇太〔子〕妃の妊娠の噂だという話が出る。そうだったら当局の人はさぞ困るだろう」（岸田 1979: 46）。

1920－40年代前半の不敬事件記録も同様に、天皇家の家庭内の「波乱」を主題とするこの類の猥談が、戦前期民衆のあいだで継続して広く流布していったことを明確に物語る（司法省 [1929] 1979, [1928]1980; 内務省 [1937-44] 1977）。1920年代以降になると、皇室の家庭生活の「乱倫振り」はクチコミだけでなく、アングラ出版物をつうじても広範に言説化され、出版警察がその取締に追われてゆく（内務省 [1928-44] 1981-82）。

この天皇家をめぐる猥談の流行は、同時代のマスコミの位相で生じた傾向とは、一見対立する事象に思われる。繰り返すとそこでは、マスコミの報じる皇室の家庭生活の円満振りとは対照的に、その破綻や亀裂の場面が好んで語られた。とはいえ両者は、「皇室の私的領域への関心」という視点から捉えた場合、まったく同質のものである。その意味で、天皇家の乱倫振りを面白おかしくつたえる噂と、皇室の団欒振りをつたえる報道とがほぼ同時期に流布し始めたのは、決して偶然ではなかった。

この猥談に象徴される、皇室の私的領域への卑俗な興味も、家庭中心主義の浸透が民衆の中に育んでいったものにほかならない。そもそも天皇家がどのような家庭生活を送っているか、育児をしているか、余暇をすごしているか等への関心の登場は、公的領域と家内

[8] 村山（1974:318）、古庄（1977）、内務省（[1937-44] 1977）、司法省（[1929] 1979, [1928] 1980）など参照。

領域の区分が理念として日本社会に誕生し、なおかつ後者がいくばくかも社会的に価値づけられることを前提とする。ぎゃくにいうと、日本の近代化の進展にともなって「家庭」という場が価値あるものとされてゆくプロセスは、「スター」たる皇室の私的領域「全般」への、民衆の関心・興味が拡大してゆく過程でもあった。繰り返すと、その関心・興味のありようとは、かれらを「幸福な家庭」として憧憬するという形に限定されるものではない。それは猥談をも含んだ広範なものである。家庭中心主義の浸透が、皇室の私的領域への社会的関心を拡大し、天皇家が脱政治的存在として観念・表象される上での最大の要因としてはたらいた、と述べるとき、その中心におかれるべきは、何よりこの点にあった。

事実、当時のマスコミも、「幸福な家庭」としてのみ皇室を表象していたわけでは決してない。宮中某重大事件（1921－22年）を代表に、女官をめぐるゴシップ、皇族の婚約破棄、皇男子の誕生しないことなど、その家庭内部の「波乱」や「不協和音」もまた、1900－10年代以降のマスコミの好んで報じたところであった。それらが読者の「不敬」な想像力を刺激していったことも、徳冨蘆花や岸田劉生の例に見た。皇室報道の世俗化がラディカルに進展した20年代の大衆紙などは、新聞紙法違反の危険を冒してまで、その家庭内のゴシップを報じたのであった。「被告人島尾好平〔『萬』発行人〕は…昭和三年六月十六日発行の同新聞…〔東京〕市内版紙上に…某々皇族は仏国留学中一婦人と御関係遊ばされ、或は某皇族は妃殿下御懐娠中腰元を懐娠せしめられ、…或は某皇族御兄弟の御仲御不和に亘らせらるる等皇族方に御非行ありたるが如き皇室の尊厳を冒涜すべき記事を掲載し、約二万部を市内其他に発売頒布…したるものなり」（司法省 [1931] 1979: 777）。

したがって、1900－10年代以降、家庭中心主義の台頭が民衆に育んだ、皇室の私的領域への関心の最も一般的な形態とは、「幸福な家庭」振りへの素直な憧れと、その裏側の「実態」をこそ求める卑俗な興味とが、複雑に交錯したものであったことだろう。1930年、千葉に「御成」中の秩父宮が、宿泊先で出会った仲居の女性は、その典型例を示している。

「そのときの宮様は…新聞でよくお見受けしたすずしげな御眼ざしで、お給仕に上りました私〔女性〕に終止お気軽に話しかけられ、いつの間にかこちらの緊張をほぐさせられてしまいました。…

私　宮様は、まだお子様はお出来になりませんか

宮様　うん、まだ出来そうもないんだよ

私　どうぞこの次、妃殿下と御一緒に〔当地に〕海水浴にお出掛け下さいませ

宮様　（笑い乍ら）うん、来たいんだけれどねえ」（秩父宮 1972: 430）。

同時期以降のマスメディアの位相で進展した、皇室の「家庭人」化・脱政治化は、ジェ

ンダー・階層・地域を越えて拡大した、このような民衆の心性に応えた結果としてこそ、捉えられる必要がある。言い換えれば、皇室の私的領域での瑣事が、全国紙によって日々報道されてゆくという、近代の日本社会に見えたあの事態は、「スター」たる皇室の私的領域への、読者のかかる「全般的」な興味の誕生に、何より支えられたものだった。

まとめれば、1900－10年代以降の日本の近代化の進展にともなう、家庭中心主義の台頭は、「スター」である皇室の私的領域への憧憬あるいは卑俗な関心を、民衆のあいだに広く増大させてゆく。こうした読者側の心性に応える形でマスメディアも、「家庭」という要素を皇室報道の中心的なトピックに据えるところとなる。そして皇室の家庭生活を頻繁につたえるマスコミの報道活動は、皇室という「家庭」への読者の興味と憧憬とを、さらに増幅させる効果を生む。これにくわえ、「家庭」関連の市場を開拓する上での重要な広告塔に、皇室の人々を起用し始めた企業側の戦略も、かかる傾向に拍車をかけてゆく。このような三者の相互作用の中、皇室は、公的領域でなく私的領域をその中心的な居場所とする存在として、民衆・マスメディアに観念・表象され、その政治的イメージを次第に希薄化させていった。2節に見た、天皇のカイライ性を直截的に暴露した諸言説の流行も、家庭中心主義の台頭をマクロな背景とした、かかる機制のもとに生じた副次的事象と推測される。ここまでの議論をおおまかに要約すると、以上のようになるだろう。

補足説明として、皇室の猥談につき、もう少しだけ論じておく。皇室をめぐる猥談の流行現象が今一つ興味ぶかいのは、「スター」である皇室の、私的領域にたいする民衆の関心の拡大が、皇室を政治的飾り物として捉える眼差しの普及と不可分につながっていた事実を、ヨリ経験的な形で実証してくれる点にある。すなわち当時の天皇家の猥談は、かれらが政務・軍務を満足に行なわず、私的領域での性的快楽におぼれている、という文脈において頻繁に語られた。その内に散見される、皇室の男性が「脳梅毒」にかかった旨のデマは、さらに示唆に富んでいるだろう[9]。人々が、皇室の私的領域への強い関心にもとづき、その最も内奥へと想像をめぐらしてゆく、その実践の最中において、かれらの皇室観の脱政治化・カイライ化がまさに生じていたことを、それは明瞭に物語る。当時の民衆の心性にそくしてみても、皇室の家庭生活にたいする社会的関心の拡大・増幅はうたがいなく、天皇・皇族の為政者としての側面を、希薄化させる結果を生じさせていたのである[10]。

---

[9] たとえばV・O・J（1959）、内務省（[1937-44] 1977:昭和16年12月分: 29, 昭和19年10月分: 14）。

[10] 誤解のないよう強調しておくと、皇室の私的領域への社会的関心の拡大過程そのものが既に、天皇家の脱政治化・カイライ化の契機をその内に含んだものである。ここで言いたいのは、戦前の民衆が皇室の私的領域への関心を最も顕著に露出させた、猥談という場面の最中に、その関心の強さに比例するごとく、皇室のカイライであることがしばしば「明瞭」に表現されていたという点にある。

7．結論

大衆天皇制下の皇室は、家庭内にひたすら埋没する、脱政治的な存在として観念・表象されることで、あらゆる政治的結果から免責される。この点で、皇室の脱政治化現象は、天皇制維持のための、重要なイデオロギー的役割を担ってゆく。松下（1959）のこの議論に従えば、1900－10年代から既に、天皇制のイデオロギー的再生産は、概観した皇室の「家庭人」化によって、あるていど担保されていたことになるだろう。すなわちそれは、天皇の名の下に行なわれた、明治以来の強権的諸政治にたいする民衆の反感が、天皇その人でなく「天皇を操る周囲」へと向かい、「家庭人」たる天皇ならびに天皇家は、民衆から免責されるという結果をもたらした。松下に倣えば、このような考察が成立する。

繰り返すと、「家庭」という要素を軸に皇室を観念・表象してゆく、近代の民衆とマスコミの眼差しは、深層ではきわめて左翼的なものだった。それは、「天皇家はカイライである」という認識と、ほぼ等価な皇室観・皇室報道ですらあった。しかし、この眼差しの社会的普及が、「だから天皇家は無用である」という、同時代（1920－40年代前半）の「主義者」らにとっては当然の論理展開[11]を見せることは、多くの場合なかった。天皇家を脱政治的存在と捉えるかれらの視点はあくまでも、家庭中心主義の社会的浸透にともない、皇室という「幸福な家庭」への憧憬あるいは卑俗な興味が拡大してゆくプロセスの内から派生したものだった。すなわちその出発点からして一般民衆のこの眼差しは、左翼主義者のそれとはぎゃくに、天皇制への好意的・肯定的態度をこそ多く含んでいた。その意味で、20世紀前半の民衆のあいだに拡大した、皇室観の「家庭人」化・脱政治化現象は、天皇主権説にたいしてはひじょうな対抗性を有しながらも、天皇制じたいの廃止を支持する方向には、はたらきにくいものだった。じっさい、皇室をめぐる猥談にしろ、大正天皇のゴシップにしろ、これを語る当時の民衆の多くに、天皇家への批判意識は希薄である。むしろそれらは、好意的な文脈においてこそ、人々に語られていった話題であった[12]。「天ちゃん」が何より、天皇への愛情表現として用いられていたことも、繰り返し強調しておくべき点だろう。大澤（1998）の議論を振り返れば、脱政治的な「無能な君主」像を、近代の民衆はみずから望んで構築していったのである。近代の日本社会に生じた天皇家の「家庭人」化・脱政治化現象が、戦後と同様、天皇制のイデオロギー的再生産を補完する

---

[11] 司法省（[1929] 1979, [1928] 1980, [1931] 1979）、内務省（[1937-44] 1977）、内務省（[1928-44] 1981-2）参照。

[12] 金子（1966）、内務省（[1937-44] 1977）、司法省（[1929] 1979, [1928] 1980）、岩崎（1980: 102-3）参照。

方向へと向ったことは、ここにおいて一定ていど立証される。

芦原金次郎に立ち戻って、本論をとじたい。精神病院暮らしを開始して以来、かれには飼猫のほかに家族はなかったようである。マスメディアの報じる「芦原帝」も同様に、家族との団欒や余暇生活におぼれることはなく、「家庭」という要素とはまったく無縁の王だった。同時代の天皇が、近代化の進展に連動し、私的領域に埋没した存在として、民衆そしてマスメディアに観念・表象されるようになっても、かれは「芦原国」の絶対君主として、「政治」にひたすら邁進していった。本論の議論をふまえたとき、戦前のマスコミの報じたこの芦原帝の中にはもう一つ、急激な近代化・大衆化を遂げてゆく日本社会に対応し切れずにとり残された、「アナクロな王」（言い換えると「明治的な王」）としての姿が見いだせよう。20世紀前半の民衆の目に映った、芦原帝のこっけいさ・愛らしさの一部は、この点にもおそらく由来する。じつに、多面的な意味合いにおいて、かれは近代史上に特筆されるべき稀有のパロディストであった。

引用文献

秩父宮記念会編、1972、『雍仁親王実記』吉川弘文館
深田祐介、1989、「稲作国家」『文芸春秋』第67巻４号
古庄ゆき子、1977、「村の大人と子どもたち」『思想の科学』第73号
原武史、2000、『大正天皇』朝日新聞社
原田熊雄、1951、『西園寺公と政局　第六巻』岩波書店
初田亨、1993、『百貨店の誕生』三省堂
出隆、1963、『出隆自伝』勁草書房
伊馬春部、1976、「懐旧切々」『文芸春秋』第54巻３号
井上章一、1995、『狂気と王権』紀伊国屋書店
伊藤之雄、2005、『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』名古屋大学出版会
岩崎昶、1980、『映画が若かったとき』平凡社
金沢誠他編、1968、『華族』講談社
金子光晴、1966、「天皇陛下」『思想の科学』第46号
加納実紀代、2002、「母性天皇制とファシズム」網野善彦他編『ジェンダーと差別』岩波書店
川村邦光、1990、『幻視する近代空間』青弓社
————、2002、「天皇家の婚姻と出産」網野善彦他編『王を巡る視線』岩波書店、2002
金田一春彦、1983、『十五夜お月さん』三省堂
岸田劉生、1979、「日記二」『岸田劉生全集　第六巻』岩波書店
北原恵、2001、「正月新聞に見る＜天皇ご一家＞像の形成と表象」『現代思想』第29巻６号
小山常実、1989、『天皇機関説と国民教育』アカデミア出版
久野収・鶴見俊輔、1956、『現代日本の思想』岩波書店
牧原憲夫、2004、「明治後期の民衆と天皇（その２）」『東京経済大学人文自然科学論集』第117号
益田勝実、1989、「天皇、昭和、そして私」『思想の科学』第114号
松島榮一、1956、「天皇家をめぐるデマ」『天皇白書』文芸春秋新社
松下圭一、1959、「大衆天皇制論」『中央公論』第74年４号
右田裕規、2002、「戦前期『大衆天皇制』の形成過程」『ソシオロジ』第145号

————、2004、「戦前期『女性』の皇室観」『社会学評論』第55巻２号
南博他、1965、『大正文化』勁草書房
————、1989、『昭和文化』勁草書房
森川輝紀、1987、『近代天皇制と教育』梓出版社
村山知義、1974、『演劇的自叙伝　第一部』東邦出版社
内務省警保局、[1927] 2000、「自明治四十五年至昭和二年　直訴其ノ他不敬事件調」池田順編『昭和戦前期内務行政史料　第２巻』ゆまに書房
内務省警保局保安課、[1939-44] 1977、「不敬不穏事件調」『特高月報』政経出版
内務省警保局図書課、[1928-44] 1981-82、「内地出版物取締状況」『出版警察報』（復刻版）第1-149号、龍渓書舎・不二出版
————、[1936] 1982、「出版物に現われたる皇室関連事項の取締と其の実際」『出版警察報』（復刻版）第90号、不二出版
中島健蔵、1967、『自画像　第三巻』筑摩書房
中薗英助、1959、「昨日の幻影は生きている」『中央公論』第74年６号
ねず・まさし、1974、『天皇と昭和史』三一書房
大澤真幸、1998、『戦後の思想空間』筑摩書房
小野賢一郎、[1929] 1993、『明治・大正・昭和』大空社
小田部雄次、1991、『梨本宮伊都子妃の日記』小学館
芹澤光治良、[1963] 1974、「人間の運命」『芹澤光治良作品集　第11巻』新潮社
司法省刑事局思想部、[1928] 1980、「思想研究資料　第八輯」社会問題資料研究会編『自大正10年至昭和２年不敬事件』東洋文化社
————、[1929] 1979、「思想研究資料　第十一輯」社会問題資料研究会編『昭和三年不敬事件』東洋文化社
————、[1931] 1979、「思想研究資料　第十四輯」社会問題資料研究会編『昭和２年昭和３年思想犯罪輯覧（下）』東洋文化社
獅子文六、[1968] 1969、「父の乳」『獅子文六全集　第十巻』朝日新聞社
須藤甚一郎、1979、「芦原将軍を知っていますか」『歴史と人物』第９年６号
高橋紘他編、1993-4、『昭和初期の天皇と宮中　第一－六巻』岩波書店
種村季弘、1979、『アナクロニズム』青土社
手塚富雄、[1951] 1981、「一青年の思想の歩み」『手塚富雄著作集　第八巻』中央公論社
徳冨蘆花、1985-6、『蘆花日記　第一－七巻』筑摩書房
鶴見俊輔、[1963] 1991、「大正期の文化」『鶴見俊輔集　５』筑摩書房
V・O・J、1959、「悲劇の帝王・大正天皇」『文芸春秋』第37巻２号
山本武利、1990、「広告と皇室記号」近代日本研究会編『近代日本と情報』山川出版社
八木義徳、1989、「私の中の天皇」『新潮』第86巻３号
横田順彌、1995、『明治不可思議堂』筑摩書房
吉見俊哉、1992、『博覧会の政治学』中央公論社
和田洋一、1984、『私の始末書』日本基督教出版局

（みぎた　ひろき・日本学術振興会）

A Look to "Home" of Imperial Household

Hiroki MIGITA

The purpose of this article is to reconsider ideological structure of the modern Emperor system and it's transformation in the phase of a social look to "home" of the Imperial Family. In other word, we seek to consider the process when modern Japanese people and the mass media turn great interest to Imperial Family's private with rise of an idea that values "home" highly. Through this attempt, we seek to elucidate that an ideological reproduction of Emperor system in 1900-30s was complemented through the Imperial Household being considered socially as people who buried in the private. It becomes a trial to bring the next new knowledge about three points. Primarily we will be able to reconsider the resistant properties that Japanese people and mass media of modern times had for an ideology policy of the government in relation to Emperor sovereign power theory. Secondly, in this paper we will be able to clarify transformation of the modern Emperor system from an angle of Imperial Family's "de-politics" process. Thirdly, we will be able to elucidate the relationship between the formation of the prewar "Popular Emperor system" and a Japanese social modernization process with relation to penetration of privatism.